

駒場祭



「頭がいいって
どういうこと？」
(2014.11.23)



「さらば我が愛！」
(2014.11.22)

共に問い、考え、語ることの創出

～こまば哲学カフェの場合

安部高太朗

本稿では、2014年度および2015年度の駒場祭（毎年11月21日から23日の三日間、東京大学駒場キャンパスで行われる学園祭）企画「こまば哲学カフェ」での哲学対話実践について紹介したい。まずは、それぞれの年度のセッションについて紹介したうえで、こまば哲学カフェの特徴を3点（多様性、一回性、協働性）に整理して示す。

2014年度のこまば哲学カフェは以下のようなセッションが設けられた。初日は、「朝の哲学対話」、「環境をめぐる哲学対話」、「コスプレだらけの対話大会」、そして「さらばわが愛！ 終わってしまう愛をめぐる哲学対話」というセッションが設けられた。二日目は「朝の哲学対話」のあと、「沖縄をめぐる哲学対話」、「SFと性：男×女×??」と続き、「頭がいいってどういうこと？」で締めくくられた。最終日は「朝の哲学対話」に続いて、「しかく・さんかく・まる」がなされ、大トリは落語を聞いたのちに対話するという「落語×哲学カフェ」、というラインナップであった。

2015年度のこまば哲学カフェの初日は、「せっかくコミュニティーボールを作るんだから、キレイに作ろう！」セッションから始まり、「モノのみかたの哲学・モノのみかたは哲学？」、上智大学哲学対話研究会（ディアログス）による「『記念日』をめぐる哲学対話—愛・誕生、記憶・忘却—」、「目隠し対話～恋は盲目？ 恋に終わりはあるの？～」、というラインナップであった。二日目は、立教大学の哲学対話サークル（SPA: St.Paul's Agora）による「出張!! SPA」からはじまり、中高生とともに哲学対話をした「開智学園ありとぶら」、「Death Cafe こまば」、と続いた。最終日は、「子どもの／で哲学」、「において、話そう」と続き、大トリは「てつたん！～哲学対話×短歌のころみ～」、であった。

それぞれの年度のこまば哲学カフェの詳細は、UTCP（University of Tokyo Center for Philosophy: 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 附属 共生のための国際哲学研究センター）のウェブサイトからブログ記事を参照いただくことにして、以下、こまば哲学カフェの特徴を述べる。

第1の特徴は、多様性（いろいろな人がいろいろなことをしていること）である。こまば哲学カフェという名前からすると、哲学好きの東大生の集まりがやっている何かという印象を持たれるかもしれないが、実際にはそうではない。企画

運営に主としてかかわっているのは P4E 研究会 (Philosophy for Everyone: 哲学をすべての人に) のメンバーである。この P4E 研究会そのもののメンバーが東京大学の学生に限られてはいない。まず社会人や大学院生、高校の教員、研究者などのようにその人の属性も違う。さらに授業で哲学対話を実践している人もいれば、イベントに実際に行ってみて興味を持って研究会に参加している人もいるというように、メンバーが哲学対話にどれくらい馴染んでいるかという点でも違いがある。

こうしたメンバーの多様さは企画 (セッション) の多様さという点でも非常にプラスに働いてきている。例えば、今年度のコミュニティーボールづくりのセッションは服作りを実際に行っている山村洋さんでなければできなかったであろう。またイラスト制作をしておられる、豊昌樹さんがこまば哲学カフェのポスターを素敵なものに仕上げてくださっている。さらに、「てつがくって、サークルだよ♥」イベントで知り合った、立教大学 SPA や上智大学哲学対話研究会のメンバーとのコラボレーションも挙げられる。以上のように、こまば哲学カフェは各セッション並びに企画運営のあらゆるところで多様なメンバーが関わっている。

第2の特徴は、一回性 (一期一会であること) である。たとえ同じメンバーで同じ問いに向き合うとしてもそのときそのときの対話の流れや個人の考えは異なるように思える。したがって、決して同じものにはなりえないという意味では、すべての哲学対話は常に一期一会のものだ、と言える。こまば哲学カフェにおいてはこの特徴が顕著に現れる。それというのも、各セッションに来てくださる「お客さん」は——もちろん企画者の知り合いだったり、研究会のメンバーだったりする場合もあるが——その日その場で、こまば哲学カフェに、あるいは哲学対話に興味を持って立ち寄ってくださる方が多いからである。また、こまば哲学カフェで「哲学対話デビュー」する人も決して少なくはない。さらには、こまば哲学カフェがきっかけで哲学対話に魅了された人——その後、P4E 研究会のメンバーにもなった!——もいる。

第3の特徴は、協働性 (対話を通じて共に考えを練り上げること) である。セッションによっては問いが既に用意されている場合もあるが、多くの場合は何をこの場で問うのかという点から、つまり、共に向き合う問いを創り出すところから哲学対話を始めている。その日初めて哲学対話に来た「お客さん」であっても、この最初の協働作業を欠かすことはない。こまば哲学カフェはそもそもお客さんを楽しませるためにこちらが哲学的な何かを用意するものではなくて、一緒に考えることを共有する場なのである。

以上、こまば哲学カフェについて簡単な紹介をしてきた。こまば哲学カフェ

は、毎年度同じ企画をしてきたわけではないが、共に問い、考え、語る場であり続けている。今後も、さまざまな人がいろいろな形で関わってこまば哲学カフェを盛り上げてくれることであろう。私もそのなかの一人として継続して関わればと思う。

「こまば哲学カフェ」に関わってのモヤモヤ

河合 隼雄

こまば哲学カフェで関わった企画の内容

2014年度の駒場祭で、こまば哲学カフェの企画に参加しました。

企画者の中でも年齢が比較的若い、ということで、中学生高校生向けの企画に関わることになりました。特にこれといった仕掛けも設けず、比較的オーソドックスな哲学対話——最初に問いを出していき、問いを整理し、その問いについて対話する——を行おうということは決まりました。議題に関しても、誰もが関わるものとして、「知性」なり「頭のよさ」に関するものにしようということに、割とすぐに決まりました。

普段「頭のよさ」について語られること、ないしはその語られ方について、陥りやすい罠があると考えていました。第一に、定型的な言葉で語られてしまうということで、第二に、偉い人ないし目上の人によって権力の中で否応なしに与えられるということです。

学校で生徒を評価するのは先生であり、入学試験で受験生の学力を評価するのもまた先生であり、いわゆる就職活動で応募する大学生の頭のよさを評価するのは企業の年長の人間です。こうしたときには、たいてい基準は前もって与えられており、それを一方的に当てはめられるか、進んで自らに当てはめるか、それだけです。頭のよさに関して、片側の主張が聞き入れられることはありません。そうしたお約束が対話の場で反復されるようなことがあってはつまらない、あってはならないと考えました。

実際のところ、もっと多様な語られ方をしているはずですが。学校の先生はまあ言うけど、僕は勉強ができないけど、本当の頭の良さとはね……などとあれこれ語られているはずですが。その中には「ルール」に乗ることへの単純な反発や、また何か別のヒエラルキーへ組み込んでしまうようなものもあるでしょう。何か独創的な観点もあるかもしれないし、凡庸な観点もあるかもしれません。しかし、「頭のよさ」に関して公式に語られるようなことだけが正しいのではなく、かといって何か別のもっと深い真理があるというのでもなく、もっと柔軟にさまざまな定義をあれこれ活用しながら暮らしている。それを一人ひとりとは当然だと思っても、実際には整合しなかったりといったことがあります。この相対化を獲得して、問題を発見することを目指したい……大まかに言って、この

ようなことを目指し、話を盛り上げつつ実行する方法を模索していたように記憶しています。

当日のイベントはどうだったでしょうか。有り難いことに大盛況でした。中学生の女の子から定年を過ぎたおじさんまで混ざって、楽しく対話することができたという感覚がありました。しかし、その盛り上がりや満足感にもかかわらず、これで良かったのか、というモヤモヤが残っているのです。

この一体モヤモヤは一体何だったのでしょうか。ごく私的な引っかけりにすぎないものではあるのですが、それを突き詰めるために駒場祭ということを一先離れて、単なる一参加者の視点に立ったときの、哲学対話に対しての感想を語らせていただければと思います。

私の哲学対話のイメージ

哲学対話の場においては、普通の会話の場と区別するためにさまざまなルールが導入されるのが通常です。これは時と場所によって違うのかもしれませんが、個々人の差もあるでしょう。その中でも私が個人として重要だと思っているものをいくつか取り上げてみたいと思います。

おそらく大抵の場合に共有されているであろうことは、「難しい言葉を避ける」とか「他人や学者の話をそのまま引用しない」といったものです。そういった専門用語を用いて特定の領域の問題を解決するという営みから哲学対話は区別されなければならず、むしろ硬直した専門用語——当然のことながら、この硬直性は厳密性という長所でもあります——の前提や、そうした言葉を発する自分たち、自分たちが置かれている場を、自分の力で考えることが大事なのです。出発点がそういった難しい言葉になってしまうのが避けられない場合があっても、しかしそれを「どういうことだろうか」と問い返すところ、自分が使っている言葉に対しての居心地の悪さを感じるところから、思考が始まるのではないのでしょうか。

しかし、自分の力で考えることが大事だからといって、それで何らかの結論に達しなければいけないというわけではないというのも哲学対話のポイントではないのでしょうか。ましてや、その場で合意に達しなければいけないということもありません。確かに、自分の考えを相手に伝わるように話すべきであるし、それが説得のような形になることもあります。だからといって、納得したり落とし所を模索したりしなければいけないというわけではないのです。調和しなければいけないという枷を外したところで自由に思考できることが、哲学対話の良さなのではないかと私は思っています。最後にすり合わせたりしなければいけないと思うと、その過程で自由に考えることが妨げられてしまうのです。

あくまで個人が自由に考えることが目的であるとするところから、一言も話さ

なくてもいい、一度も発言しなくてよいというルールも出てきます。この点に関しては、哲学対話自体のゴールや目的が異なれば認められないのかもしれませんが。最初はどうも参加できない人も何かしら自分の考えを言葉に話せるようになることが対話の目的であり、「すぐに発言しなくてよい」ということが暫定的に言われるのだとしても、やはり全員が声を出して対話に参加している状態が理想である、という立場もあるのでしょうか。しかし、私はそうは考えません。最後まで一言も話さなかった人がいたとしても、そのことで対話の良し悪しが変わるものとは思いません。

むしろ、私は哲学対話においてこそその沈黙が好きです。話すことが要請されているように感じられている日常生活から切り離され、半ば自動的に湧いてくる言葉を次々に見送る。代わりに、他の人の言葉で思考が満たされていく中でも、なお言わずにはいられないこと、あえて問うてみたいことが頭に浮かんでくる、というような経過が好きなのです。このようにして浮かんでくる言葉は、初めに流れるように湧いてきた言葉たちと質的に違うように感じられます。これを「呼び止める」言葉であると言ってみたいくなります。既に自分が場所を占めていることを当たり前のように思いながら、言葉の届く先への配慮なしに投げつけられる言葉ではありません。自分以外の人びとは自分に目をくれることもなく歩いている、そのような不安の中で「自分がここにいる」「自分がこのようにある」ということを必死に主張する言葉なのです。両者は決定的に異なります。相手のことがよく見えている（と思いがっている）からこそ、取り立てて配慮することなく投げつけられる言葉と、相手のことが分からないからこそ、よくよく目を凝らした上で、徹底的な賭けとして発さざるを得ない言葉とは、まるで異なるのです。

哲学対話の経験や意義を、まったく個人的なものに切り詰めてしまっていると叱られてしまうかもしれません。正直に告白すれば、まずはこの個人的な喜びにつられて、自分自身の喜びのために哲学対話に参加しています。しかし、一方で、この喜びは自分自身だけのものでないと信じています。例えば自分がファシリテーションをすとなれば、自分のこの喜びを無責任に尺度にします。この無責任さは逃れ得ないものに思われます。参加者各自が自分自身に責任を持つということを目指しているからには、そのことにファシリテーターが責任を持つことはできません。一人分以上の責任を持ってしまった途端、求めていたところの自由が遠ざかってしまうのではないのでしょうか。

改めてモヤモヤを考える

このあたりにモヤモヤのヒントがありそうです。

さて、実際に自分たちが「こまば哲学カフェ」という形で運営するとなると、

工夫しなければいけない点が出てきますし、単なる参加者として対話に耽るわけにもいかなくなります。そこにモヤモヤがあったのではないのでしょうか。

駒場祭で「哲学カフェ」なんてものにわざわざ来るような方々は、哲学対話それ自体に慣れている方は圧倒的に少ないでしょう。また、「哲学」というものにハードルの高さを感じない、もしくはハードルを越えて来るからには、しゃべることが好きな人が多いでしょう。祭りの一イベントであるからには、思ったことをいっぱいしゃべって帰らなければ損だ、ぐらいに思う人もいるでしょう。だから、上で述べたような無責任さは通用しないだろうし、もっと運営側が身乗り出して制御しないといけなくなるでしょう。このように場に責任を持つことになり、無責任に浸ることはできなくなります。啓蒙する側に立つことで、自分たちが変わるという可能性が閉ざされてしまうのではないかと、というのがモヤモヤの正体だったのではないかと気づきました。終わった後で無事うまくいったことを喜べても、何かを制御することができた安堵というのは、どこか哲学対話の精神とずれてしまうのではないのでしょうか。

あるいは、別のモヤモヤにも気付かされます。いったいどういう資格で良い意見と悪い意見を区別することができるのでしょうか。教室がいっぱいになる人数が参加するとなると、意見を切り捨てる必要が出てきます。大人が子どもに教え諭すといったことがあってはならないと言いつつ、自分たちは参加者の上に立っているということにして間接的な仕方教え諭すという、同じことをしているのではないかとも思われてきました。

もう少し一般的に言い換えれば、次のようになるでしょう。哲学対話を運営する側として振る舞うということ自体が、自分の思う哲学対話の良さを遠ざけてしまうように感じられてしまっていたのです。とはいっても、これは仕方ないことでしょう。常に誰もが無責任でいては対話の場すら開かれない、運営する側としての態度を徹底すれば、一参加者としては不満足なこともある、という、ただそれだけのことでしょう。実践の中でどのようにこのモヤモヤを乗り越えられるのか、今のところアイデアはありませんし、どこかに答えがあるのかどうかも分からないというのが、率直な所感ではあります。しかし、モヤモヤに向き合わなければならないということは、外部に大きく開かれているという希望の裏返しなのかもしれないとか、ここでは何らかの勇気が試されているのであり、そのこと自体は決して悪いことではないのではないかと、という気もまたするのです。

つくる目線で「哲学カフェ」を

山村 洋

僕は、普段は婦人服をオーダーメイドで作ることを仕事にしている、講師として大学で服作りを教えたり、ワークショップなどで手芸や洋裁の先生もしています。

洋服を作る時や服作りなどを教える時、また日々の当たり前の暮らしにおいても、哲学的に深く考えることは、とても大切なことだと考えてきたし、「お前は理屈っぽい」なんていうセリフは、小学生の頃から言われてきた記憶がありますが、僕にとっての哲学は、「善悪の彼岸って言葉、ステキ！」という感じの軽薄な動機で、ニーチェの著書を読んだ程度でした。

ちなみに、同じニーチェ著の『ツァラトゥストラはかく語りき』の内容は今でも少し覚えています。『善悪の彼岸』の内容は全く思い出せません。ということなので「Philosophy for Everyone」の、Everyoneの部分は当事者ですけど、Philosophyの部分は、かなりの部外者です。

そんな僕が、なぜ哲学対話にかかわるようになったかというと、2013年にたまたまインターネットで、駒場祭で開催していた「こまば哲学カフェ」の情報を見かけたことがきっかけでした。その時は、哲学対話に参加したことは一度もなかったし、そもそも哲学カフェや、哲学対話なんて名前すら聞いたことがなく、どういう内容のものなのか何も知りませんでした。が、駒場という場所には、それ以前から仕事で何度も行ったことがあるし、その時の企画内容に関心があったし、家からも比較的近いし、なのでフラッと行ってみました。という、わりとテキトウな動機が始まりでした。

こんな少々いいかげんな哲学対話との出会いでしたが、相性が良かったのか、住んでいる場所が近いことによる特権なのか、その後も色々な関連イベントにも参加させてもらったり、2014年の「こまば哲学カフェ」は、スタッフとして参加していて、2015年の僕にとっての三回目の「こまば哲学カフェ」では、どういうわけか企画提案をさせて頂くことになりました。

もっとも、「いつかは企画提案をしよう」なんていう前向きのモチベーションは、僕には全くありませんでしたが、定期的開催、参加している研究会で、いろいろと研究会メンバーと話をしているうちに、「僕の問題意識って哲学対話

に使えるかも？ しかも企画のバリエーションとして、けっこう面白いかも？」と、うっかり思うようになったのは、ブレイクスルーか？ 運の尽きか？

まあ、こういう性質のイベントでは、参加者よりも企画提案者の方が、得るものが多いというのは鉄則でもあるので、ブレイクスルーなんでしょうね、きっと。

哲学という言葉に対して何を思い浮かべるのかは、人によって様々だと思いますが、僕が真っ先にイメージするのは、「彼女がいつも着ているファッションには、彼女自身の人生哲学を感じる」や、「このカメラ（車や時計など、何でも良いですけど）には、開発者の哲学が宿っている」「この地域で生き続けることが、私の哲学です」などのように、注意深く見ていないと見過ごしてしまいそうな人の美意識や、日々の暮らしの中の当たり前のことで、そういった暮らしの中の当たり前のことこそが哲学だというのは、特別な記念日より普通の一日が大切だという、僕の人生哲学の現れでもあると思います。

これまで僕が参加してきた哲学対話は、毎回とても興味深く楽しいんですけど、対話だけで完結する世界には必要以上に関心はなく、モノを作る人としての立ち位置は大切にすべきだと考えていて、せっかく自分が主催するなら最終的には何か具体的な形に表わせるようなものを、と思い企画しました。

そこで、モノを「見る」ことや「作る」ことをテーマに取り入れようと、「モノのみかたの哲学・モノのみかたは哲学？」というタイトルの、「何かを見るって、そもそもどういうことなの？」を問う内容にしました。

実際に手を動かして作る経験や知識と、ものの見え方との関連性には、以前から、とても関心があって、リサーチとしても良い機会なので、企画には僕がいつも考えてきた問題意識を組み込んでみました。「目の前にモノが存在することと、目の前にあるモノが見えることは、違うことなんですよ！」「どのように世界を見ているか、ということこそが、その人にとっての人生哲学なんですよ！」と。

また、「まあ、とりあえずやってみれば良いか」「結果に満足がいかなかったら、参加者が悪いんだし」と、多様な人がいろんな切り口で、自由に哲学に関わることができる寛容さや、いい加減さ、お祭り感覚も、「こまば哲学カフェ」の良い所だと思うし、初めて参加したころは気付かなかったことですが、「こまば哲学カフェ」って、いろんな切り口の対話を一気に体験して、それぞれの共通点と差異とを感じる事が出来るので、哲学対話との最初の出会いとしてはとても良い、と後になって思うようになりました。

そう考えてみると、「こまば哲学カフェ」って、国際展示場で開催しているゲ

ームの見本市や、化粧品の無料お試しセットや、デパートの物産展での試食コーナーに、ちょっと似ていませんかねえ？

あと、もう一つ連続で開催した企画が、「せっかくコミュニティーボールを作るんだから、キレイに作ろう！」というタイトルのもので、これは、コミュニティーボールという哲学対話で使うアイテムが、「なんかキレイじゃないし、イヤだなあ」と、常々思っていたことが発端でした。

コミュニティーボールに限らず、キレイなものを作るためにはキレイに作るための理論があって、それを適切に実践すると多くの場面において大丈夫、という印象を持っています。なので、そのことを実践する時間にもなったし、理由を深く考えることでは、哲学との共通点もあるように思いました。

とはいえ、いくら理論を築いたといっても、この段階では実際に作ったことがなかったし、そもそも作ることで、何度やっても分からないこともあるので、多少の不安もありましたが、結果は大成功だと言ってもいいような自画自賛の完成度でした。対話においては、何が大成功かは測りづらいことですが、この感想の対比も、興味深い結果になってくれました。

これらの一連の企画を経て再確認したことは、作ることを含めたクリエーションと、哲学とは相性が良いということです。僕の専門分野に限らず、クリエーションと哲学対話との組み合わせは、いろいろと発展性がありそうです。

僕は日頃から、深く考えるという哲学的な思考と、よく見ることや、しっかりと表わすことの表現者的な思考とは、何か共通の根のようなものがあるように感じてます。「上手く作れません」「思うように作れません」という時の、出来ない理由をよくよく観察してみると、確かに手先の器用さなどの要因もあるけど、かなりの部分が上手く出来たモノ、思うように出来たモノと、そうでないモノとの違いが、実は見えてなかったり、違いについて考えられていないんじゃないか、と思うようになりました。

「あっ、それって哲学じゃん！」と、ちょっと無理矢理な解釈をするようになったことが、今回のテーマ設定に至ったきっかけでもあります。あと、駒場祭の時には、あまり関係がないかもしれないけど、「よく見てみなさい！」とか、「実際に、自分の手を使って作って考えてみなさい！」という、モノ作りを指導する教育者としての意図もあります。

服装の分野においては、制作技術に関しては、かなり体系化が来ていますが、その根本にもなる、「見えるって、どういう状態なの？」や、「そもそも立体にするって、どういうこと？」については、あまり体系化が来ていないよう

に感じていて、この体系作りに哲学対話の手法がヒントになるようにも思っています。

ということは、これは後々の授業などでも応用できるかもしれない、そうなるかと一石二鳥ですね。あるいは、「こまば哲学カフェ」が予行演習で、本番は学校の授業やワークショップ？

そうして思い返してみると、大学で教えるようになったことも、僕にとって大きな影響がある気がしています。しかも、大学で教え始めたのも、哲学対話に出会ったのと同じ2013年で、この双方は特に関連性のない時期の一致なんですけど、もしかして2013年が、僕の人生にとっての重大な年になっている。かも。

ところで、人々の暮らしの中で哲学が占めることができる範囲って、一体どこからどこまでなのでしょう？

僕は、暮らし全体を料理に例えるとすると、哲学とは塩コショウやスパイスのようなものだと考えています。それ自体には飢えた人の生命を救う力は何もないし、空腹を満たしてくれないかもしれないけど、毎日の食事の時間のいつもの食事を、いつもより豊かにしてくれる存在にはなれるはず。「人として生きるって、そういうことじゃないんでしょうか？」と。

そういう意味でも、哲学という言葉は、最近は専門職ではない人達にも広く使われるようになってきた、デザインという言葉と似ている気がしています。これらは、本来は特殊な職業や立場の人や、特別な場面で使われるようなものではなくて、全ての人にとって日頃から当たり前に使われたり、意識されるべき表現なんでしょうね。そういう意味でも、哲学をすべての人に、というコンセプトには、とても共感しています。なので、哲学が占めることができる範囲は、きっと無限に広がっているはず。ただ、僕にとっては、「デザインやモノ作りをすべての人に」でもあって、個人的にはそっちの方が、はるかに重要なことなんですけど。

でも、このことは、研究者などの専門家を別にすると、哲学は目的にはなりえない、ということも意味しそうです。塩コショウのための食事なんて、ほとんど想像できないのと同じように。

そんな感じで、僕にとっては三年目となる哲学対話ですが、これって一見すると哲学とは無関係な場面でも活躍させる要素が、まだまだ沢山ありそうなので、哲学を専門としないモノを作る人の目線で、これからも引き続き宝探しです。

とはいえ、『善悪の彼岸』を再び読み返すことはないんだろうなあ。あ、こんな文章を書いているうちに、だんだんと気になってきました。

だから哲学も人生も、オモシロイ？

問いかけっこ

豊 昌樹

「聴く力をなめるなよ！」

哲学研究者の友人 A は大学の講義で言い放ったという。

元 UTCP 所属のこの友人によって私の人生に「哲学」と「対話」が飛び込んできた 2011 年。この友人との哲学カフェはカタチをかえながら今も続いています。

さらに数年後、梶谷先生との出会いによって「哲学対話」をさらに知ることとなり、P4E 研究会（Philosophy for Everyone）への参加を通じて 2014 年と 2015 年の駒場祭で「こまば哲学カフェ」の企画運営に加わることにもなりました。

知らなかった世界に飛び込むとき、新しいコミュニティに加わりたいとき、自分の意欲だけでは難しいことがあります。人と人や場をつなげるハブとなる人、特にハブとなれる立ち位置の人が行動すれば人の輪はつながりやすいです。梶谷先生は、まったくの部外者である私にも気軽に接してくださり、他の研究者や学生の方々との交流にもつながりました。私は違うジャンルの人たちとの交流を楽しんでいるつもりでしたが、梶谷先生の好奇心旺盛さと交遊範囲の広さには驚かされます。梶谷先生によって広がった新しい世界と私の今までの世界をつなげ、私にできる哲学対話の可能性をたのしみたいです。

哲学対話の場

問い、問われ、ともに考え、語る、哲学対話。哲学研究者の友人 A と梶谷先生の哲学対話の場は全く違うものでした。友人 A はコミュニティボールを使うことはなく、梶谷先生はコミュニティボールを使われます。特別な哲学の知識や対話スキルを求めすぎずに実践されていることは共通でした。それは私にとって「哲学っておもしろいかも！」という探究心につながりました。実践者によって対話の場の進行方法や空気感が違うのは当然ですが、もし最初に専門知識やスキルを求められる対話の場に出会っていたら、二度目以降の参加意欲は低かったと思います。哲学知識と哲学対話の探究をより高度に純粋に求めている場や、参加者を選別している場など。もちろん、専門知識やスキルを高く求める人や場があることも重要かと思っています。

2011 年 1 月

都内某所の行きつけのカフェ。哲学研究者の友人 A が哲学カフェをはじめようとしていた日に私もちょうど居合わせました。正式なイベントとしては翌月からでした。哲学に疎かった私が、「問い、問われる」という緊張感が楽しさに変わっていった日でした。知ったかぶる必要もなければ、知らないことを恥じることもなく。既成概念がボロボロと更新されていくのが快感でした。

「例えば?」「具体的には?」……アレ??

知っているつもりのことが、うまく答えられないことの多さを思い知ったのです。問い合うことは聴き合うことであり考え合うことであり……

別の解釈を得て思考が再構成され……

分解されては構成され、また分解され、さらに分解され、もっと分解され……なるほど! だったり、モヤモヤ!

発言せずに聴いているだけでも思考が整理されていくことも心地いいのです。

ここの哲学カフェは特種でした。対話が好きな人や専門家や教員の集まりでもなく、DJ やクリエイターや謎のオジサンや詩人やひきこもり名人やら……。参加申込み制ではなく、カフェの空いた席でダラリとやるのです。他のお客さんも普通に居合わせたり数分だけ参加してみたり。飲食と雑談混じりのラフな場で、実験的な試みも多くて紹介が難しいです (笑)。

肝心の「問い」は、抽象的な問いから具体的な社会問題までなんでもありで、タブーの無さが他所と大きく違っていました。たまに哲学カフェ巡りをしている参加者が驚いて戸惑っていたのも今では納得 (笑)。

このころから友人 A の影響で UTCP のイベントに何度か参加するようになりました。いっしょではなく、「ひとりで」です。主に「発達障害当事者研究」「現象学」「子どものための哲学対話」など。他にも様々なイベントに参加していると外国語での進行でサッパリ分からなかったことが何度ありました (笑)。

出版編集と広告デザインの仕事に携わってきた私は、作家やクリエイターらのイベントに元々よく参加していました。私自身がワークショップの主催側であることもしばしばあり、地域交流やコミュニティ問題に年々関心を深めていました。交流手法を学ぶために各所のワークショップや講座に参加しまくっては比較検証をし、実践者に質問を投げかけてきました。そして具体的な目的や課題へのアプローチ方法を頭の中で巡らせるのです。

多くの実践者や参加者と接していて、「もっと別のやり方はないかなあ」という探究心が私はかなり強いことを自覚しました。逆に、探究心が無い人が多いこ

とが寂しくもありました。アイスブレイクの目的と効果、対話手法の目的と効果、参加者の属性と「今」その場を俯瞰しての対応、案外考えていない人が多く……。考えるよりも行動に美德を持っている人が多いことも感じます。私は「考えるだけの人」でもステキだと思っています。

問いかう場をつくりたい

多くのワークショップの場でも「対話」が実践されていますが、哲学対話のように「問いかう」ことはなく、「聴き合う」ことが中心でその場しのぎで意見をまとめて発表させられることがいつもストレスでした。「〇年後の〇〇」を考え合うという設定も非常に多く、その場だけで「考えたつもり」になることを主催者は本当に望んでいるのでしょうか？ 壮大なアイスブレイクなのではないでしょうか……。

他者の違う意見を問いかい聴き合うには、安心と安全を感じられる関係性と場があまりにも重要なのだと思います。対話慣れしていない人の集まりで問いかうには、場の説明とルールの説明が大変重要です。この重要性は問いかうことや対話の場だけでなく、さまざまなワークショップや集まりでも重要だと言われているのですが、実践するとなると難しいようです。それを自然と実践されているのが梶谷先生の哲学対話の場でした。導入説明だけでなく、アイスブレイクと本番での何気ない気軽な発言と空気づくりが要所要所で成されているのです。多くのワークショップやイベントを比較検証してきた私にとって、梶谷先生はあらゆる要素を兼ね備えて実践されていました。梶谷先生を含めて有名な実践者は話がおもしろい人が多いですが、私のように話すのが苦手な人でも配慮すべき点を再度確認しあいたいものです。

哲学対話や哲学カフェの実践者の多くは、導入の説明設計を省いています。説明している場合でも参加者視点がある人は少ないです。ワークショップ実践者の多くにもそれを感じます。「分かる人だけ」で集まりたいのならそれでいいのですが。この問題はコミュニティの内輪化問題とかなり似ており、内側の視点と外側の視点の話ができる人とそれを考えようとする人が少ないことも問題です。それなのに「コミュニティデザイン」だとか「地域交流」を実践している人・実践したという人が増えていることは違和感とともに興味深く、うまく問いかう場をつくりたいことが私のテーマのひとつです。

私は「対話」は「言語だけじゃない」という想いがあります。身体表現やアートや音楽などのコミュニケーションも対話だと感じているんです。正論めいた理屈や妥当性や客観性や社会規範や権威や多数派なんかよりも、個々の「感情」の

正直さの前には無力に感じるばかりです。分かり合えなさを起点として交流をたのしみつつ、共感ごっこや問いかけっこをもっともったのしみたいです。

精神疾患者との当事者研究に参加していると、何が異常で何が健常なのか分からなくなることが何度ありました。「伝える」「伝わり方」という意味で、デザインの構図やフォントの使い分けも配置の常識も違うのです。「常識」と思っていることを疑うたのしさと、別の「常識」を認識する余裕をいつも持っていたいです。

問い合うことが難しい心持ちの人もたくさんいることを認識しつつ。

内輪の安心感やたのしさもいいのですが、外に向かえる人はどんどん外へでかけましょう！

「お互いの差異を承認しつつ共感する『共生の実践』」のための探究をしあいましょう！